

場面や状況に応じて話す力を育成する指導の在り方（第二年次） —即興で話す活動の充実を目指した「逆向き設計」に基づく指導過程の工夫を通して—

長期研究員 松本 聡 二

《研究の要旨》

新学習指導要領では、「話すこと」の技能において、その場で考え表現する場面や状況の中で、既有的知識や技能を活用しながら即興で話す力が求められている。原稿を用意するなどの準備をせずに即興で話すことは、生徒にとって負荷が高く、習熟させるには、目標を明確にしながら長期的に指導を行う必要がある。そこで、「逆向き設計」に基づいた指導過程の中で、その場で考え話す力を育成する効果的な指導の在り方について研究を行った。

I 研究の趣旨

中学校学習指導要領解説外国語編では、指導が、文法・語彙の知識の理解に重点が置かれ、「話すこと」「書くこと」などの4技能を高める言語活動が適切に行われていないことが指摘されている。さらに、その場で表現する内容を考えながらコミュニケーションを行うことが求められる場面や状況の中で、習得した知識や技能を生かしながら自分の考えや気持ちなどを即興で話すことに課題があるとし、改善を求めている。

原稿を書くなど、表現したいことを事前に準備してから話す活動に慣れている生徒たちにとっては、即興で話すことが求められる活動に対して感じる負担は小さくない。また、英語の4技能の中でも、特に「話すこと」に関しては、目標に対する達成状況をペーパーテストで把握することが困難であるため、実際に話すことを求めるパフォーマンス課題が必要となる。

そこで、昨年度、第一年次の実践では、ALTによるインタビューテストにおいて即興で話すことをゴールとして設定した。そして、そのゴールの達成に向けて、各活動の負荷を調整しながら段階的に即興で話す活動に近付ける指導過程を構築し、指導に当たった。しかし、生徒と教師の間で、「話すこと」における目標や評価規準・基準を共有できていなかったため、生徒が、どのくらい話せるようになりたいか明確な目標をもてず、次の活動に向けて、自らの課題に気づき、その改善に向けて努力する姿につなげることができなかった。

そこで、二年次である本年度の実践においては、「逆向き設計」に基づいた指導過程の中で、指導と評価の一体化を図り、生徒と教師が共通の目標を見据えながら、その場で考え表現する力の更なる向上が図れるようにしたいと考えた。

II 研究の概要

1 研究仮説

「話すこと」の指導において、以下の視点に基づき指導を行えば、場面や状況に応じて話す力が育成されるだろう。

[視点1] 「逆向き設計」に基づいたCAN-DOリストとルーブリックの作成・共有
[視点2] 即興で話す活動の繰り返しと振り返りにより気づきを促し改善につなげる指導過程の工夫

2 研究の内容

(1) 場面や状況に応じて話す力について

Levelt(1989)^{※1}によると、発話においては、既有的の語彙情報、文法情報、音韻情報を活用しながら、「何を話すか（概念化）」「どう話すか（形式化）」「どう発音するか（調音化）」の複数のプロセスを経るとされている。

そのため、相手と情報や意見のやり取りを即時的に行う対話などの即興で話す活動の中で、「何を話すか」「どう話すか」などについて、生徒がその場で考え表現する経験を積むことが重要であると考えられる。

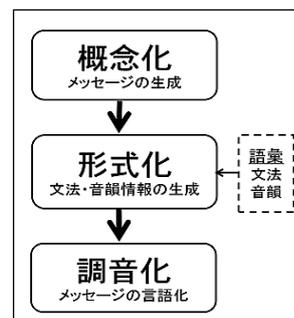


図1 スピーキングプロセス

※1 Willem J.M Levelt(1989) *Speaking: From Intention to Articulation*

(2) 「逆向き設計」に基づくカリキュラムデザイン

Grant WigginsとJay McTigheの「UNDERSTANDING by DESIGN, 1998」によって示された「逆向き設計」によるカリキュラムデザインの考えに基づいて指導過程を構築し、授業に当たることとする（図2）。

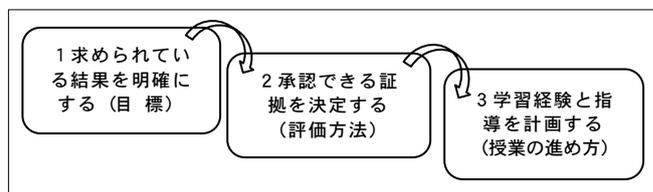


図2 「逆向き設計」の三段階

「何を身に付けさせたいか」という教育の成果から逆向きに授業の進め方を設計しながら、指導を行う前に評価方法、評価規準・基準を設定する。その結果、生徒は具体的な目標の達成を目指して学習を進めることができ、生徒の学習意欲の向上や主体的な態度の育成にもつながると考える。

「話すこと」の技能は、従来、目標を達成するための練習や指導の意味合いが強い、学習タスクとして行う言語活動の中で評価が行われることが多かった。したがって、目標と評価と指導の一体化が図られ、身に付けた力を適切に見取ることができていたとは言い難い状況であった。そこで、ALTによるインタビューテストを、「何を身に付けさせたいのか」という教育の成果を見取る評価タスクとして実施することとした。このような評価機会を設定することで、学習タスクとして行う、普段の言語活動に対する生徒の取組が、評価タスクにおけるよりよいパフォーマンスを目指して活性化されることも期待される。

(3) 繰り返しと振り返りのある指導過程

即興で話す活動は、生徒にとって学習経験も少なく、負荷が高いため、一度学習して終わるのではなく、繰り返し行うことで、話すことの熟達化が促進されると考える(図3)。

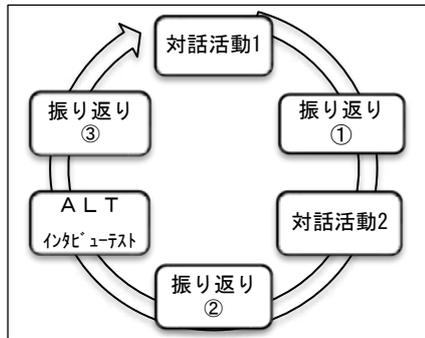


図3 指導過程のイメージ

また、対話活動の間に、協働的な学びの中に気付きを促す振り返りの時間を設けることで、自らの課題を客観的にとらえ、改善に向かう姿へとつなげた

い。英語を苦手とする生徒については、振り返りの場を、語彙や表現を獲得する機会とする。その際、タブレット端末などのICT機器を活用し、録画した発話の様子をペアやグループで振り返ることで、互いのよさを共有するとともに、改善を図りたい表現内容等の具体的な課題についても、気付きを促すことができるようにしたい。

3 研究の実際

対象生徒 第3学年 60名(2学級)
 評価タスク ALTによるインタビューテスト(5月, 2時間)
 授業実践Ⅰ 「Unit3 Fair Trade Event」(6月, 10時間)
 授業実践Ⅱ 「Unit4 To Our Future Generations」(10月, 10時間)
 評価タスク ALTによるインタビューテスト(10月, 2時間)

(1) [視点1]に基づく手だての実際

以下の3段階を通して、学習到達目標であるCAN-DOゴールの達成に迫った。

① [第1段階] 目標：CAN-DOゴールの設定・共有

英語科教員5名による教科部会において、卒業時までに生徒に身に付けさせたい「話すこと(やりとり)」の力について協議し、CAN-DOゴールを設定した(図4)。

また、学習到達目標に対する達成度を、ALTによるインタビューテストによって評価することを教員間で確認するとともに、生徒たちとも目標と評価方法を共有した。

学習到達目標：CAN-DOゴール
「つなぎ言葉を用いながら、感想や意見を述べ合ったりして話を続けることができる。また、使用場面に応じた表現で話すことができる。」

図4 学習到達目標

② [第2段階] 評価方法：パフォーマンス課題の設定とルーブリックの作成

ア パフォーマンス課題の設定・共有

生徒に課すパフォーマンス課題として、ALTによるインタビューテストを設定した(図5)。評価の機会を複数回設けることで、学習到達目標の達成に向け、「話すこと」の力の熟達化が図られていくことをねらった。

	インタビューテストにおける主な質問
1回目	-Which do you like better, playing sports or watching sports? Why?
2回目	-Do you want to buy fair trade products? Why?
3回目	-What can you do for Fukushima's future? Why?
4回目	-Which do you like better, playing sports or watching sports? Why? -Do you like winter? Why?

図5 パフォーマンス課題

イ ルーブリックの作成

学習到達目標として設定した評価規準では、達成度の幅を適切に評価することは困難である。そこで、目標達成に向かうまでの複数の段階における基準を示したルーブリックを作成・活用することが重要となる。その際、より妥当性のある基準にするため、文部科学省による「英語力調査」の「話すこと(やりとり)」で用いられた採点基準を活用した。さらに、より適切な評価がなされるよう、教員間で検討を行い、評価方法の共通理解を図った(図6)。

「ルーブリック検討会」の進め方
1 生徒(7名)のインタビューテストの動画を視聴する。
2 ルーブリックを基に評価する。
3 全員の評価を黒板に書き出す。
4 同じ評価だったところ、違ったところの特徴を確認する。
5 意見が分かれた動画を見直す。

図6 ルーブリック検討会の手順

③ [第3段階] 授業の進め方：即興で話す言語活動

単元末のALTによるインタビューテストや生徒同士で行う対話活動において、負担を大きく感じることなく即興で話すことができるようにしたいと考えた。そのため、先述のスピーキングプロセスを考慮に入れながら段階的に負荷が高まるよう、次の手順のように一つ一つの言語活動の負荷を調整しながら進めることにした。

ア 1min-chat:身近な話題についての対話活動を取り入

れた。身近な話題であるため、「概念化」の負荷が低く、「形式化」のプロセスに注意を向けやすくなった。

イ 音読活動：内容読解で理解している内容の音読のため、「調音化」のトレーニングとなった。

ウ 再話活動：読んだ内容を自分なりに再構成して発話することが求められ、英語の語句レベルでの「概念化」が図られていないと、アの1min-chatよりも大変負荷の高い活動となる。そこで、既に内容を理解し、イの音読によって定着が図られつつある語や表現が増えた段階で、思考ツールを用いながら再話に取り組みせることにより、「形式化」のプロセスに注意が向くようにした。

エ オピニオン（意見発表活動）：自分の考えや意見を述べる際、英語の語句レベルでの「概念化」が図られていないと、ウの、ある程度、本文の学習が進んだ段階で行う再話よりも、大変負荷の高い活動となった。そこで、教科書本文についての考えや意見を、イの音読や、ウの再話活動の過程で定着が図られつつある語句や文を活用して述べることを促した。また、思考ツールを用いて話す内容を事前に整理することで、「形式化」のプロセスに注意が向くようにした。

(3) [視点2]に基づく授業の実際

上記エのオピニオンにおいては、教科書本文に対する自分の意見を伝え合う対話活動を行った。単元を通して段階的に指導を行ってきたとはいえ、意見を即興で伝え合うことに負担を感じる生徒はまだ多い。そこで、対話活動を複数回繰り返し、活動の合間に、発話内容について振り返る場を設けることで、気付きを促し、発話内容の改善が図られるようにした。Unit3の単元末に行った、2回の対話活動における発話内容の変容をみると、理由を述べるときに“because”を付け加えたり、主語と動詞の語順が正しくなったりするなど、より正確な発話に改善できた生徒が増えた。このことから、対話活動を繰り返す際に振り返りの場を設けることは、スピーキングの各プロセスにおける処理を促進するとともに、話すことに対する不安を軽減し、積極的にコミュニケーションを行おうとする態度の育成にもつながることが分かる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) ルーブリック評価から

英語科のJTE2名、ALT2名で、事前と事後に実施したインタビューテストに対するルーブリック評価を行った。文法や表現に誤りが少なく、伝えたい内容を伝えることができている「2」と「3」の評価の割合の変容

をみると、事前では22%だったのが、事後では47%に増えている。

(2) 平均発話語数・文数の変容から

平均発話語数は6.2語から14.7語、平均発話文数も1.0文から3.2文へと増えている。図7の生徒Aは、事前では一文で答えているが、事後では複数の文で答えており、さらには、理由も付け加えることができた。

質問	Which do you like better, playing sports or watching sport? Why?
事前	I like basketball.
	↓
事後	I like playing basketball. Because I play basketball player...very interesting.

図7 生徒Aのインタビューテストにおける発話の変容

(3) 意識調査の変容から

「英語の学習に目標をもって取り組んでいますか」という質問に対して、肯定的な回答をした生徒の割合は、事前は63%であったが、事後は84%に増加した。さらに、どんな目標をもっているか記述した内容をみると、「英語を話せるようになりたい」「英語がうまくなりたい」等、実際のコミュニケーションにおける英語使用への意欲の高さを表す回答の割合が、50%から80%に増加した。

(4) 「場面や状況に応じて話す力」についての考察

ルーブリック評価や発話語数の変容から、「何を話すか」「どう話すか」などについて、その場で考え表現する力がある程度伸長したことが分かる。また、意識調査の変容からは、それらの力の伸長に伴い、即興で話すことに対して少しずつ自信が形成され、「もっとできるようになりたい」という意欲につながったことが見て取れる。これらの変容は、生徒と教師がパフォーマンステストにおける目標を共有することの重要性や、「逆向き設計」に基づく指導過程の中で、段階的に即興で話す活動の充実を図っていくことの有効性を示唆しているとも言える。さらに、即興で話す活動を繰り返す中で、気付きや改善を促す振り返りの場を設けることが、「何をどう話すか」についての考えを深めるとともに、表現の幅を広げることにも寄与したことも推察される。

2 今後の課題

パフォーマンス課題の評価において、特定課題のためのルーブリックを活用したが、次の段階として、学習到達目標の達成までの尺度が記述された、長期的ルーブリックを作成し活用することにより、更なる目標と評価と指導の一体化につながると考える。また、評価本来の目的から考えても、一人一人の振り返りを充実させることで、生徒の発話能力がより一層伸長することが期待される。そのため、ルーブリック評価を個別にフィードバックする効果的な方法を模索したい。